岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第601集

堰田（せきた）・机地（つくえじ）遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査

２０１２

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
（公財）岩手県文化振興事業団

堰田・机地遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区に関連して、平成22年度に発掘調査された奥州市堰田遺跡・机地遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、堰田遺跡・机地遺跡では、平安時代の竪穴住居跡と土師器・須恵器を主体として、多くの遺構・遺物が確認されました。周辺地域における過去の暮らしを知るための手がかりとなる、貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県県南広域振興局農政部農村整備室、奥州市教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成24年３月

公益財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　　池　田　克　典

例　言

1　本報告書は、岩手県奥州市胆沢区南都田字二丁目40－２ほかに所在する堰田遺跡、岩手県奥州市胆沢区南都田字机地81－１ほかに所在する机地遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　本遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と岩手県県南広域振興局農政部農村整備室との協議を経て、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部に農家負担分を補助している。

3　岩手県遺跡台帳に登録される本遺跡の遺跡番号と遺跡略号は、次のとおりである。

堰田遺跡…遺跡番号：ＮＥ15－1362、遺跡略号：ＳＴ－１０

机地遺跡…遺跡番号：ＮＥ15－1394、遺跡略号：ＴＪ－１０

4　発掘調査の調査面積・期間・担当者は、次のとおりである。

堰田遺跡…調査面積：2,123㎡（本調査1,378㎡、確認調査745㎡）

机地遺跡…調査面積：2,419㎡（本調査1,569㎡、確認調査850㎡）

調査期間：平成22年10月１日～12月２日

調査担当者：川又　晋・小林弘卓

5　室内整理の期間と担当者は、次のとおりである。

整理期間：平成22年11月１日～11月15日、整理担当者：川又　晋・小林弘卓

平成23年10月１日～10月31日、整理担当者：川又　晋

6　野外調査における委託業務は、次の機関に委託した。

基準点測量：株式会社中央測量設計

航空写真撮影：東邦航空株式会社

7　室内整理における委託業務は、次の機関に委託した。

石材鑑定：花崗岩研究会（代表 矢内桂三）

8　本報告書の執筆は、Ⅰ章を岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に依頼した。Ⅱ・Ⅲ章は、川又、Ⅳ・Ⅴ章は小林、Ⅵ章は川又が執筆した。報告書の編集・校正は、川又・小林が行った。

9　本遺跡の調査成果は、調査概報、当センターホームページなどで概要を報告しているが、本書の内容が優先するものである。

10　本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡　　例

1　図　　版

（1）　遺 構 図 版

遺構図版は、竪穴住居跡・土坑・溝跡の順で種類毎、番号順に掲載した。

遺構図版の縮尺は以下を原則とし、各図にスケール・縮尺を付した。

竪穴住居跡の平・断面図：１/40、カマド・炉跡の平・断面図：１/20

土坑の平・断面図：1/40、溝跡の平・断面図：1/40

層序を示す数字は、基本層序にはⅠ～Ⅴなどのローマ数字、遺構埋土には１～５などのアラビア数字を用いた。

（2）　遺 物 図 版

出土遺物は、平安時代の土師器・須恵器・石器類、12世紀のかわらけ・陶器、近世の銭貨がある。

土師器・須恵器は、出土地点別→土師器・須恵器の種別→器種別に分け、掲載番号を振った。その他の遺物は少量のため、土師器・須恵器の後に続けて番号を付けてある。遺物図版は、掲載番号順に作成してある。

遺物図版の縮尺は以下を原則とし、各図にスケール・縮尺を付した。

土師器・須恵器・石器類：1/3、かわらけ・陶器類：1/3、近世の銭貨：1/1

図版中に網かけを使用している場合は、個々に凡例を示している。

2　表

掲載遺物にはすべて観察表を付した。観察表内の（　）内の数値は残存値、＜＞内の数値は推定値である。

3　写 真 図 版

（1）遺構写真図版

遺構写真の掲載順は、本文や図版に概ね従うようにした。

（2）遺物写真図版

遺物写真図版は、掲載番号順に作成してある。各写真の大きさは、図版と同一縮尺になることを基本として編集した。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡の環境……3
1　遺跡の位置……3
2　周辺の地形……3
3　周辺の遺跡……3

Ⅲ　調査・整理の方法……5
1　野外調査……5
（1）調査方法……5
（2）基本層序……6
（3）調査経過……6
2　室内整理……7
（1）遺　構……7
（2）遺　物……7
（3）保　管……7

Ⅳ　堰田遺跡……9
1　調査区……9
2　検出遺構……9
3　出土遺物……9

Ⅴ　机地遺跡……12
1　調査区……12
2　検出遺構……12
（1）竪穴住居跡・住居状施設……12
（2）溝　跡……15
3　出土遺物……21
（1）土　器……21
（2）石　器……23
（3）銭　貨……23

Ⅵ　まとめ……32
報告書抄録……61

図版目次

第1図　遺跡位置図…… 2
第2図　周辺の遺跡図…… 4
第3図　調査範囲図…… 8
第4図　堰田遺跡－遺構配置図、ＳＫ01…… 10
第5図　机地遺跡－遺構配置図…… 11
第6図　ＳＩ01①…… 16
第7図　ＳＩ01②、ＳＩ02①…… 17
第8図　ＳＩ02②、ＳＩ03…… 18
第9図　ＳＩ04・05、ＳＤ03…… 19
第10図　ＳＩ06、ＳＤ01…… 20
第11図　土器①…… 24
第12図　土器② …… 25
第13図　土器③…… 26
第14図　土器④…… 27
第15図　土器⑤…… 28
第16図　土器⑥、石器、銭貨…… 29

表　目　次

第1表　土器観察表…… 30
第2表　石器観察表…… 31
第3表　銭貨観察表…… 31

写真図版目次

写真図版1　航空写真①…… 35
写真図版2　航空写真②…… 36
写真図版3　堰田遺跡①…… 37
写真図版4　堰田遺跡②…… 38
写真図版5　堰田遺跡③…… 39
写真図版6　堰田遺跡④…… 40
写真図版7　堰田遺跡⑤…… 41
写真図版8　堰田遺跡⑥…… 42
写真図版9　机地遺跡①…… 43
写真図版10　机地遺跡②…… 44
写真図版11　机地遺跡③…… 45
写真図版12　机地遺跡④ …… 46
写真図版13　机地遺跡⑤…… 47
写真図版14　机地遺跡⑥…… 48
写真図版15　机地遺跡⑦…… 49
写真図版16　机地遺跡⑧…… 50
写真図版17　机地遺跡⑨…… 51
写真図版18　机地遺跡⑩…… 52
写真図版19　机地遺跡⑪…… 53
写真図版20　机地遺跡⑫…… 54
写真図版21　机地遺跡⑬…… 55
写真図版22　土器①…… 56
写真図版23　土器②…… 57
写真図版24　土器③…… 58
写真図版25　土器④…… 59
写真図版26　土器⑤、石器、銭貨…… 60

Ⅰ　調査に至る経過

経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区の事業区域には堰田、机地、銭倉、石田Ⅰ・Ⅱ、沢田、机地館、要害の７つの埋蔵文化財包蔵地が存在し、事業施行に際し試掘調査を行ったところ、今較、堰田、机地の２遺跡について記録保存が必要となったため発掘調査を実施したものである。

南下幅北部地区は、奥州市胆沢区南都田に位置し、地区の農地は大部分が水田であり、明治35年～38年に県内初の区画整理事業により10区画に整備されているが、農業機械の大型化が進む中では小区画であること、農道が２～３ｍと狭小で通行に支障があること、水路が用排水路兼用土水路のため用水不足や排水不良であり維持管理に多大な労力を投じていることなどから、地域営農の確立に十分な対応ができない状況である。このため本事業により水田約113haを標準区画１haの大区画とし、併せて用排水路、道路の整備を行い、もって地域農業の中心となる経営体を育成し活力があり生産性の高い地域営農の確立を目指している。

工事施工に先立ち、地区内に存在する遺跡について、当室は岩手県教育委員会に対し試掘調査を依頼（平成20年11月13日付け県南広農整第149-1号）した。岩手県教育委員会は、平成20年12月～平成21年３月にかけて４遺跡の試掘調査を実施し、堰田、机地の２遺跡について発掘調査が必要である旨を回答（平成21年６月25日付け教生第447号）してきた。

その結果を踏まえて、当室は岩手県教育委員会との協議調整を経て財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託し発掘調査を実施することとなった。

（岩手県県南広域振興局農政部農村整備室）

S＝1/50,000 水沢・北上

第１図　遺跡位置図

Ⅱ 遺跡の環境

1 遺跡の位置

堰田遺跡・机地遺跡は、奥州市胆沢区南都田に位置する。両遺跡は南北に隣接し、北側が堰田遺跡、南側が机地遺跡である。胆沢区の北東端、水沢区との境界付近に位置し、JR東日本東北本線水沢駅から西北西に約4.0㎞、胆沢総合支所からは北東に約4.3㎞の距離である。地形図上では、国土地理院発行地形図1:50,000「水沢」の図幅に含まれ、北緯39度８分58秒、東経141度５分54秒付近にあたる。

2 周辺の地形

奥州市胆沢区の西部秋田県境付近には、標高1,000m級の山々からなる奥羽山脈があり、ここに源を発した胆沢川は東方に流れ、広大な胆沢扇状地を形成しながら、同市水沢区にて北上川と合流する。胆沢扇状地上には広大な河岸段丘群が展開し、南側から北側へ向かい低下している。本遺跡は、胆沢川に近い水沢低位段丘上に立地し、胆沢川は遺跡の北方約2.5kmにある。遺跡の標高は71m前後である。

胆沢扇状地は東北有数の穀倉地帯であり、農地開発やそれに伴う水利事業などが古くから盛んに行われてきた。遺跡周辺も一面の水田地帯の中に民家が点在するといった景観で、過去に行われた耕地整理事業により、直線的な水路や畦畔に区画された平坦な田面が整備されている。これより古い時代には、無数の微高地やその間を流れる小河川により起伏のある地形であったと想定されるが、微高地部分は削平、低地部分は盛土がなされ、一見して本来の微地形を観察することは、現在では難しい。ちなみに、この地区における耕地整理事業は県内で最も早い時期に行われたものであり、明治35年に当時の南都田村村長であった栗野善知の主導により着工されたと伝えられる(胆沢町史刊行会2002)。

3 周辺の遺跡

これまでの発掘調査などにより、胆沢扇状地上には数多くの遺跡が分布し、古くから人類が様々な活動を行い発展していった様子が明らかになってきている。主要な遺跡としては、本遺跡のすぐ南側に日本最北端の前方後円墳である角塚古墳があり、西暦802年築造の胆沢城は、本遺跡の北東側約４kmの胆沢川・北上川合流点付近に位置する。以下、近隣の遺跡について簡単に紹介していく(第２図)。

なお、３・４・７・９の遺跡については、本遺跡調査後の平成23年度に当センターによる調査が行われており、一部は平成24年度も継続調査、一部は報告書作成中である。

1．堰田遺跡　報告遺跡
2．机地遺跡　報告遺跡
3．沢田遺跡　境田堰を挟んで、机地遺跡のすぐ南側に隣接する。昭和61年、胆沢町教育委員会（当時）による調査が行われ、奈良時代と平安時代の竪穴住居跡、土師器・須恵器などが確認された。。
4．石田Ⅰ・Ⅱ遺跡　机地遺跡の南東側約150mに位置する。古墳時代～平安時代の集落跡である。
5．宇南田遺跡　机地遺跡の南側約550mに位置する。昭和60年、胆沢町教育委員会により調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡、土師器・須恵器などが確認された。

6．角塚古墳　机地遺跡の南南西約700mに位置する。日本最北端の前方後円墳であり、昭和49・50年、胆沢町教育委員会による調査で詳細が明らかとなった。円筒埴輪・形象埴輪などが出土している（林謙作・高橋信雄・伊藤鉄夫1976）。５世紀後半～６世紀初に築造された岩手県最古の古墳であり、昭和60年、国指定史跡となった。平成10～12年にも調査が行われている。

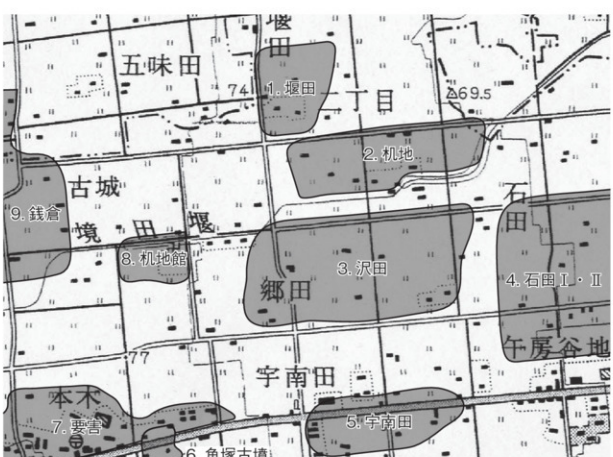
7．要害遺跡　机地遺跡の南西側約700mに位置する。別称止々井館としても登録されている。平成６年、胆沢町教育委員会により調査が行われ、奈良時代と平安時代の竪穴住居状遺構、土師器・須恵器などが確認された。

8．机地館跡　机地遺跡の南西側約400mに位置する。中世の城館跡（別称盛興館）として登録されている。現在、盛興院という寺院がある。

9．銭倉遺跡　堰田・机地遺跡の西側約600mに位置する。奈良・平安時代の散布地として登録されている。

参考文献

林謙作・高橋信雄・伊藤鉄夫　1976『角塚古墳調査報告』　胆沢町教育委員会
胆沢町教育委員会　1986『宇南田遺跡　緊急調査報告書』　胆沢町埋蔵文化財調査報告書第16集
胆沢町教育委員会　1988『沢田遺跡　調査報告書』　埋蔵文化財調査報告書第18集
胆沢町教育委員会　1995『要害遺跡　緊急発掘調査報告書』　胆沢町埋蔵文化財報告書第26集
胆沢町教育委員会　2002『角塚古墳　整備基本計画策定に伴う形態確認調査報告書』　胆沢町埋蔵文化財調査報告書第28集
胆沢町史刊行会　2002『胆沢町史Ⅵ　近・現代編１』　胆沢町



S＝1/10,000（「1/25,000 供養塚」を拡大して使用）

第２図　周辺の遺跡図

Ⅲ　調査・整理の方法

1　野　外　調　査

（1）調　査　方　法

調　査　区

調査区は本調査区と確認調査区がある。本調査区は、水路等建設予定の範囲で、工事による掘削が遺構確認面以下まで及ぶため、通常通りの発掘調査を行った。確認調査区は、道路等建設予定の範囲で、工事による掘削は遺構確認面まで及ばないため、調査は表土除去と検出までを原則としている。

調査区はすべて連続している訳ではなく、複数の箇所に分散している。調査の便宜上、調査区に番号を付し、1区・2区・・・19区（10区は欠番）のように表記している。

1～9区が堰田遺跡、11～19区が机地遺跡に属する。1～7・11～15区が本調査区（用排水路建設予定範囲）、8・9・16～19区が確認調査区（道路建設予定範囲）である。調査前の状況は、1区が畑、3区が雑木林であり、その他の区域は水田およびそれに付随する水路等であった。

試掘・表土除去・遺構検出

人力による試掘を行い、検出面までの基本層序を把握した後、バックホーによる表土除去を行った。重機による掘削が困難な調査区では、人力のみで表土除去を行った。表土除去は、Ⅲ層上面までを目安として行った。

表土除去の後、遺構検出・精査を行った。遺構を確認しなかった調査区については、全景写真の撮影と調査範囲の実測のみを行い、調査終了とした。

遺構名登録・遺構精査

遺構名は、略号と精査順の番号で表記した。

使用した略号は、ＳＩ：竪穴住居跡、ＳＫ：土坑、ＳＤ：溝で、ＳＩ01、ＳＫ01のように表記した。

なお、調査時には遺構番号を付したものの、その後の過程で遺構として認定されなかったものについても、再度その番号を付すことはせず欠番とした。今回の調査で欠番となった遺構名は『ＳＤ02』のみである。

土坑など規模の小さい遺構は2分法、竪穴住居跡など規模の大きい遺構は4分法を原則とし、埋土観察用のセクションベルトを設けた。ただし、調査区の幅が狭いこと、遺構の残存が悪いことから、ベルトの設定方法は個々の遺構の状況に応じ適宜工夫した。

写真撮影・実測・土層注記

埋土の断面を観察し、断面写真撮影・断面実測・土層注記を行った。土層注記は『新版標準土色帖』（2006年版、小山正忠・竹原秀雄著）を用い、土色・締まり・粘性・混入物などを記録した。土層の記録の後、完掘作業・完掘写真撮影・平面実測を行った。

写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを使用した。

実測作業は、断面実測では手書きによる従来通りの方法でマイラー用紙に記録し、平面実測では電子平板を使用した。

（2）基　本　層　序

遺跡範囲内の旧地形は微高地部分と低地部分があり、過去の工事により高位部分は削平、低位部分は盛土といった造成がなされたと考えられる。基本層序は、①微高地部分と②低地部分で異なるため、2つに分けて述べていく。

①微高地部分（12区付近）

Ⅰ層：黒褐色土（表土・耕作土・盛土）

Ⅱ層：黒褐色～暗褐色土（旧表土）

Ⅲ層：灰白色砂質土（10YR5/2）　遺構検出面

Ⅳ層：黒色粘土質土

Ⅴ層：砂礫

Ⅰ層は現在の表土で、田の耕作土・盛土等を含む。これは新しい時代に人為的に造成されたものであり、バックホーで除去した。①の範囲は基本的には削平を受けていると考えられ、地点による削平の度合いによりⅠ層直下の層は異なる。Ⅱ層は部分的に残存し、遺構を検出した区域においてはⅡ層にも遺物が含まれるため、人力によりⅢ層まで掘削している。Ⅲ層は灰白色の砂質土で、この上面が遺構検出面である。Ⅲ層の下にはⅣ層とした黒色粘土質土層があるが、調査区内の数か所にトレンチを入れて確認した限りでは、この層から遺物は出土しておらず、Ⅲ層を最終検出面と捉えている。

②低地（旧河道）部分

Ⅰ層：黒褐色土（表土・耕作土・盛土）

Ⅱ層：黒褐色～暗褐色粘土層

Ⅲ層：黄褐色～灰白色粘土層　遺構検出面？

Ⅰ層は現表土である。Ⅱ層は粘土質で、低地部分ほど堆積が厚く、堆積の厚い所では層の中位に薄い灰白色粘土の層を挟む。Ⅲ層はグライ化した灰白色粘土層で、この上面を最終確認面と判断した。②の範囲ではⅡ層に遺物はほとんど含まれないため、Ⅲ層上面までバックホーで一気に掘り下げている。地表面から1ｍ近く下がる場所も多く湧水が著しいため、Ⅲ層以下は確認していない。

（3）調　査　経　過

10月1日、資材を搬入し、調査を開始した。現場事務所は調査区の南西端付近に設置した。11区の試掘から着手する。

10月6日、重機（バックホー0.45t）搬入。重機による表土除去を開始する。以降、南側の机地遺跡の調査区から表土除去を進め、その後、北側の堰田遺跡へ移動するが、最後に残った1区・8区に隣接した畑で耕作中のため、重機作業を中断せざるを得ず、10月21日に重機を一旦搬出した。

10月25日、測量業者による基準杭打設を行った。遺構が密集するのは12区のみであったため、数名の作業員が12区の精査を行い、その他の作業員で、12区以外の粗掘り・検出等を進めていった。

11月10日、重機を再び搬入し、1区・8区の表土除去に着手する。11月15日、重機の作業が終了した。

11月17日、航空写真撮影。12区の遺構精査以外の作業は終了し、川又と作業員19名はこの日より中畑城遺跡へ移動する。小林と作業員6名で残りの作業を継続する。

11月22日、現場の作業がすべて終了し、資材搬出を行った。

12月2日、終了確認。

2　室内整理

（1）遺　　構

手書きの遺構断面図は、スキャンし、デジタルトレースした。それを平面図と合成し、第2原図を作成した後、デジタルデータとして遺構図版を作成した。

遺構写真は、デジタルデータを整理し、遺構写真図版作成を行った。

（2）遺　　物

出土遺物は、土器類（土師器・須恵器、12世紀のかわらけと陶器）、石器類（敲磨器類）、金属製品（銭貨）などがある。水洗処理は主に現場で行った。

土師器・須恵器は、出土地点ごとに重量を計測し、接合作業を行った。残存状況が良く図化できるものを主に選別し、仮登録・石膏入れを行い、実測・トレース・拓本作成・写真撮影などを行った。

土師器・須恵器以外の遺物は、出土点数が少ないのですべて掲載とし、実測・トレース・拓本作成・写真撮影などを行った。

遺物トレース図・拓本は、スキャンしてデジタルデータ化し、遺物図版を作成した。

遺物写真撮影は、一眼レフデジタルカメラを使用した。撮影したデータを編集し、遺物写真図版を作成した。

（3）保　　管

出土遺物、遺物実測図・拓本、遺物写真、遺構実測図、遺構写真などの調査資料は、収納台帳を作成し、当埋蔵文化財センターの所定の場所に保管してある。

3区
4区
8区
1区
2区
5区
X=-94300
6区
堀田遺跡
X=-94400
9区
7区
机地遺跡
15区
X=-94500
14区
18区
17区
12区
13区
11区
19区
X=-94600
16区
Y=-22800
Y=-22900
Y=-23000
本調査区
確認調査区
0
1：2000
50m

第３図　調査範囲図

Ⅳ 堰 田 遺 跡

1 調 査 区

調査区は９箇所（１～９区）に分割している。これを大きく分けると、西側（１・２・８区）、北側（３区）、東側（４・５区）、南側（６・７・９区）の４箇所に分かれる。調査前の状況は、１区が畑、３区は雑木林であり、その他の区域は田およびそれに付随する水路等であった。

旧地形は微高地部分と低地部分に分かれる。微高地部分は、１区南側・３区・６区西側などごく限られた範囲で、検出遺構は１区の南東部で確認した土坑１基（ＳＫ01）のみである。５区・６区東側・７区は低地部分にあたるとみられ、表土下がグライ化した粘土層となる範囲が大きく、湧水が著しい。

2 検 出 遺 構

ＳＫ01土坑（第４図、写真図版８）

[位置・検出状況]１区の南東に位置し、Ⅲ層で検出した。

[形状・規模]平面形はやや楕円形を呈する。開口部径135×120cm、底部径85×72cm、深さは30cmを測る。

[壁・底面]壁は上半部でやや外傾するが、鍋形の断面形を呈する。底面は目立った凹凸もなく、概ね平坦である。

[堆積土]３層に細分した。中位ににぶい黄褐色土を含むが、主体となるのは黒褐色土である。状況からは自然堆積の可能性が高いと思われる。

[遺物]なし。

[時期]不明。

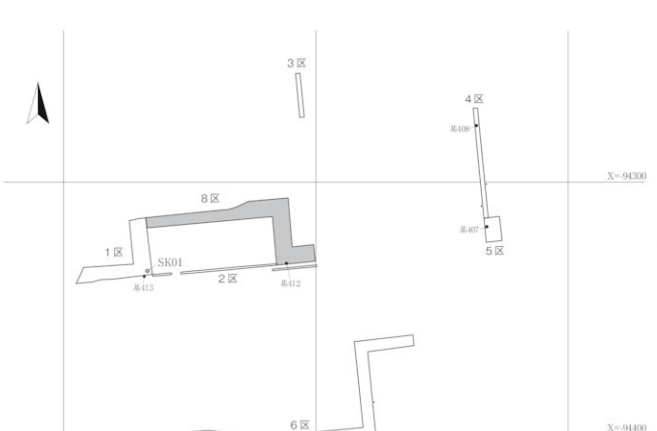
3 出 土 遺 物

調査区全体で、土師器722.4ｇ、須恵器638.5ｇが出土している。すべて遺構外出土である。掲載したものは、須恵器坏２点（１・２）のみである。

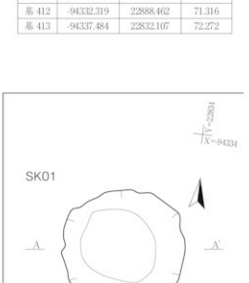
１・２とも底部付近のみ残存し、底部切り離しは、１が回転ヘラ切り、２が回転糸切りである。

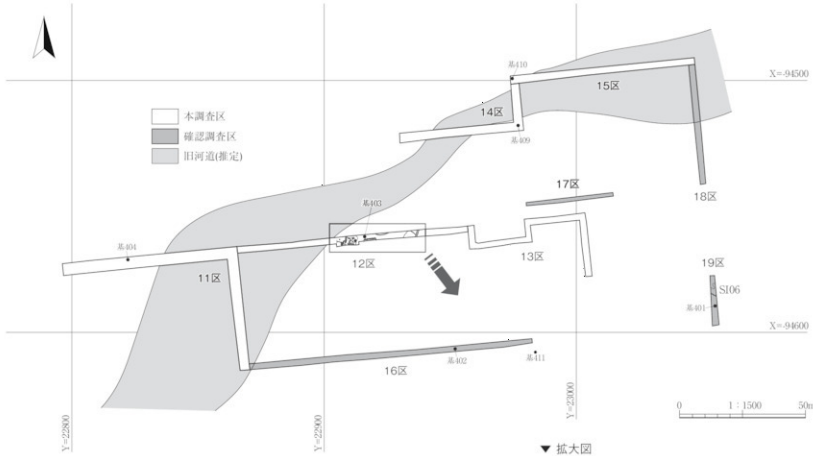
不掲載遺物の中には、土師器甕、須恵器壺の破片なども含まれる。

第４図　堀田遺跡―遺構配置図、ＳＫ01



点名	X	Y	標高
基 405	-94402.288	22859.370	71.598
基 406	-94402.838	22894.756	71.198
基 407	-94317.733	22867.868	70.950
基 408	-94277.603	22963.692	70.984
基 412	-94332.319	22888.462	71.316
基 413	-94337.484	22832.107	72.272





点名	X	Y	標高
基401	-94589.542	23055.019	70.200
基402	-94606.518	22591.928	70.877
基403	-94562.043	22916.085	70.688
基404	-94571.176	23822.211	71.414
基409	-94517.867	22976.894	70.215
基410	-94499.280	22974.559	70.270
基411	-94607.864	22983.793	71.136

第5図　杭地遺跡―遺構配置図

Ⅴ 机 地 遺 跡

1 調 査 区

調査区は、大きく９箇所（11～19区）に分かれる。調査前の状況は、田およびそれに付随する水路等であった。今回の調査範囲は、遺跡範囲の主に西側である。

遺構を確認したのは、12区、19区である。特に、12区では竪穴住居跡が集中し、今回の調査で確認した遺構・遺物の大半はこの12区で確認されたものである。12区・19区を含む調査区南東側の範囲は、主に微高地状の地形であったと推定され、調査前にある程度削平を受けていたと考えられる。これに対し、11区・14区・15区などを含む北西側は表土が厚く、その下は主にグライ化粘土層で湧水がみられ、旧河道と推定される。遺物は表土中から僅かに出土しているが、遺構は確認されなかった。

2 検 出 遺 構

検出した遺構は、竪穴住居跡５棟、住居状施設１棟、溝跡２条である。

（1）竪穴住居跡・住居状施設

ＳＩ01竪穴住居跡　（第６・７図、写真図版14・15）

[位置・検出状況]12区に位置し、Ⅲ層で検出した。検出時から煙道部とカマド本体部の被熱範囲が確認できたため、容易に竪穴住居跡であることが想定されたが、大部分が調査区外へと続くため、確認できたのは一部にとどまる。

[形状・規模]西側は水田の排水路に切られ残存せず、大半は調査区外にあるため全容は不明である。確認できたのは北東壁の一部とカマドのみである。おそらく典型的な隅丸方形を呈するものと思われる。残存する北東壁より、一辺390cm以上の規模が推測される。主軸方位は北東にある。

[壁・床面]壁は緩やかに立ち上がり、壁高は20cm前後が残存する。床面は東側にやや低位面が見られ、全体的に硬く締まる。南側には貼床が施されている。

[堆積土]埋土としては４層に細分できる。にぶい黄褐色土を主体とし、最下層には廃棄されたと考えられる炭化物層がある。また、貼床土としては複数層が縞状に堆積しており、このことから日常的に土を貼り直し、成形していたものと推測される。

[カマド]北東壁に設置されている。燃焼部付近は煙道から一段皿状に低くなっており、暗赤褐色の焼土が厚く形成され広がっている。燃焼部焼土の直上面には灰汁状の粘土が堆積している。袖は遺存していない。煙道は北東方向に延び、長さ約125cmを測る。先端に向かって下り勾配となる。煙出は一段低く円形状に掘り込まれており、残存する深さは27cmである。現況の水田造営時に上部が削平されており、開口しているため掘り込み式か刳り貫き式かの判別は付かない。

[その他]同図にＰ１～３を記載したが、本遺構に付属するものではないと考えられる。Ｐ２については不明だが、Ｐ１・３は本遺構を切っていることから新しい時期のものと判断できる。いずれも平面形は径30cm前後の円形を基調とするもので、深さは約25～30cmを測る。また、本遺構南東側の貼床土より下位には、遺物を包含する土層が続いている。おそらく、本遺構より旧い遺構が存在するものと思われるが、調査区境の断面上でのみ確認できるもので、調査区境を北端とする何らかの遺構が南側

に広がっているものと思われる。
[遺物]土師器4,773.6ｇ、須恵器864.2ｇが出土した。土師器甕11点、土師器坏３点、須恵器坏５点を掲載した。
[時期]出土遺物から平安時代（９世紀前半頃）と推定される。

ＳＩ02住居状施設（第７・８図、写真図版16・17）
[位置・検出状況]12区に位置する。重機による表土除去の際に遺物が集中する地点を確認したが、周辺の状況からも見ても、既にⅢ層面に近い状態で上面がかなり削平されている様子であった。また、焼土の周縁が確認できる状況であったため、当初は単独の炉跡と考えたが、周辺にある土坑状の掘り込みや貼床状の埋土との関連から、周辺一帯を含めた住居状の施設と解釈することとした。
[形状・規模]上記のような状況のため、全容は不明である。貼床と思われる範囲を考えると、470cm以上の規模を測るものと推察される。
[壁・床面]壁を確認できる部分がないため不明。床面は平坦で、締まりが認められる。
[堆積土]灰黄褐色土が表土直下にわずかに残存しており、これが遺構本来の埋土と考えられる。
[床面施設]炉１基、土坑１基、柱穴状ピットが８個確認された。炉は掘り込みを有するもので、全体では約85×80cmの円形を呈する。東側が約65×50cmの楕円状に一段低く掘り込まれている。壁は東側の楕円状部分は直角に近い立ち上がりであるが、西側は皿状の緩やかな断面形状を呈する。堆積土は暗褐色土と黒褐色土が主体で、焼成された粘土状のブロックなどを含む。堆積土の上位には、土師器片が一面に広がり、故意に敷き広げられたようにも見える。西側の皿状の底面と東側の壁面には厚さ最大７cmの橙色の焼土が広がる。焼土の下位には黄褐色土が一部で見られることから、構築時に壁面および底面の一部に貼土をしているものと思われる。炉の北東方向には土坑（Ｋ１）が確認できる。平面形状は８の字状を呈し、全体としては80×60cmを測る。西側は皿状の浅い窪みだが、東側は一段低い円形の掘り込みをもつ。壁は西側では緩やかだが、東側は直角に近い立ち上がりである。堆積土は暗褐色土が主体である。柱穴状ピットは８個確認されたが、形状・規模等に統一性や傾向は掴めない。Ｐ１～Ｐ７については、本遺構に伴うものかについても不明である。Ｐ８のみが炉との堆積土の関係から、本遺構内のものと判断できる。
[その他]南側の調査区境に遺物が入り込んでいたため、委託者および地権者の了解を得て約１mほど調査区外を検出面まで掘削させていただいた。第７図にその範囲を示したが、遺構と思われるプランが７基で確認できる。そのうち一番東側のものについては、プランの縁辺に焼土が確認できるものであった。本遺構内炉と同じような形態をするものなのかもしれない。他のものについても、本遺構に伴う何らかの施設である可能性も考えられる。
[遺物]土師器7,182.3ｇ、須恵器1,269.1ｇが出土した。土師器甕12点、土師器鉢１点、土師器坏４点、須恵器坏４点を掲載した。
[時期]出土遺物から平安時代（９世紀前半頃）と推定される。

ＳＩ03竪穴住居跡（第８図、写真図版18）
[位置・検出状況]12区に位置し、Ⅲ層で検出した。北側の大部分が調査区外へと延びるため全容は不明で、カマド等の施設も確認できなかったが、形態から竪穴住居跡と判断した。
[形状・規模]確認された部分より、一辺約480cmの隅丸方形が推測される。
[壁・床面]確認部分では、壁は緩やかに立ち上がり、深さは約20cmを測る。床面は概ね平坦である。

[堆積土]黒褐色土の単層である。
[遺物]土師器111.7ｇ、須恵器42.6ｇが出土した。この他、12世紀の陶器１点が出土し、掲載した。
[時期]出土遺物から平安時代～12世紀の可能性が考えられる。

ＳＩ04竪穴住居跡（第９図、写真図版19）
[位置・検出状況]12区に位置し、Ⅲ層で検出した。水田造営時に上部が大きく削平されているため、確認できたのは壁溝のみである。カマド等の施設は確認できなかったが、推定される形態から竪穴住居跡とした。
[形状・規模]調査区境にわずかに残存する断面状況と確認された壁溝から、一辺約470cmのものと推測される。確認された部分は南側と思われ、大半は北側の調査区外に続くものと思われる。
[壁・床面]確認部分では、直角に近い立ち上がりをし、深さは６cmを測る。前述した状況のため、床面の状態は不明である。平均幅約25cmの壁溝と思われる溝が確認できる。
[堆積土]暗褐色土の単層である。
[遺物]土師器163.4ｇ、須恵器75.3ｇが出土し、須恵器坏１点を掲載した。
[時期]出土遺物から平安時代の可能性が考えられる。

ＳＩ05竪穴住居跡（第９図、写真図版20）
[位置・検出状況]12区に位置し、Ⅲ層で検出した。水田造営時に大きく削平されているようで、北東壁の一部しか確認できない。カマド等の施設も確認できなかったが、形態から竪穴住居跡と判断した。
[重複遺構]ＳＤ03と重複する。断面状況より、本遺構の方が旧いと判断した。
[形状・規模]大部分が調査区外へと続き、さらに残存状態が良くないため、詳細は不明であるが、一辺400cm以上の方形を基調とするものと思われる。
[壁・床面]確認部分では、壁は直角に近い立ち上がりをし、深さは最大約25cmを測る。床面はほぼ平坦だが、後世の撹乱が著しく、柱穴等の床面施設の有無については不明である。
[堆積土]２層に細分したが、いずれも黒褐色土である。
[遺物]土師器368.2ｇ、須恵器16.5ｇが出土し、土師器甕１点を掲載した。
[時期]出土遺物から奈良時代の可能性が考えられる。

ＳＩ06竪穴住居跡（第10図、写真図版21）
[位置・検出状況]19区に位置する。Ⅲ層で検出した。19区の遺構検出を行った際、南側ではⅢ層が現れたものの、中央から北端までの範囲全体が黒褐色土となり、当初は遺構であるとの認識はできなかった。しかし、その後この黒褐色土範囲を徐々に掘り下げた結果、南壁の立ち上がりと床面を確認した。ただし、北側は撹乱により床面から削平され、南側は床面が残存するものの上位は全体的に削平されており、遺存状態は非常に悪い。また、遺構の東側・西側はいずれも調査区外にあり、カマド等の施設は確認できなかったが、竪穴住居跡と判断した。
[形状・規模]南壁はほぼ一直線状で、確認できた長さは260cmである。北壁は削平され、東・西壁は調査区外にあり、全体の形状・規模ともに不明であるが、方形基調と推定される。
[壁・床面]壁はやや外傾し、残存する壁高は10cm程度である。全体的に貼床が施され、床面は概ね平坦である。床面にはそれほど締まりはなく、触感による識別は困難であるが、所々に薄い炭化物の広がりが認められる。柱穴等の床面施設は確認していない。

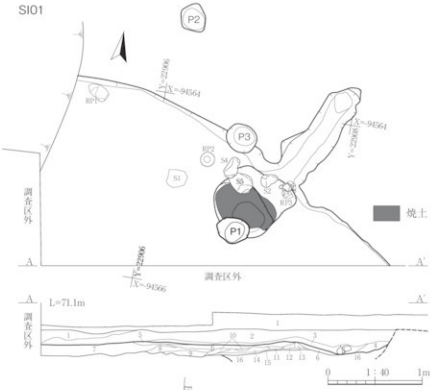
[堆積土]３層に細分しているが、１層は撹乱を受けた層であり、残存する本来の埋土は２・３層のみである。灰黄褐色土を主体とする。
[遺物]土師器1,109.1ｇ、須恵器718.2ｇが出土し、土師器坏１点を掲載した。
[時期]出土遺物から平安時代と推定される。

（２）溝　　跡

ＳＤ01溝跡（第10図）
[位置・検出状況]12区に位置し、Ⅲ層で検出した。
[重複遺構]ＳＩ02と重複する。新旧関係については不明である。
[形状・規模]北側が調査区外へと延びるため全容は不明だが、確認部分では長さ約280cm、幅約40～50cmを測り、直線状に延びる。軸方位は北－南である。
[壁・底面]削平により残存状態は良くない。非常に浅く、断面形は皿状を呈するが、南端では一段深く掘り込まれている。そのため、南側が低位となる。深さは３～８cmを測る。
[堆積土]当初は別遺構の付属部分と捉えており、先に掘削していたため、断面図に堆積土の記載がないが、暗褐色土を主体とする。
[遺物]土師器151.0ｇが出土した。掲載した遺物はない。
[時期]不明。

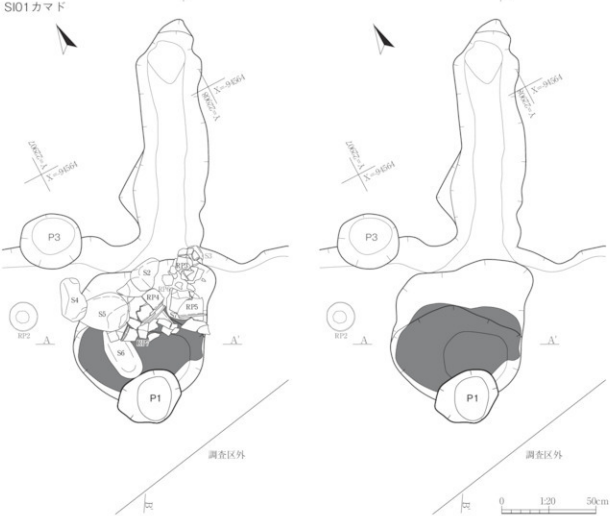
ＳＤ03溝跡（第９図）
[位置・検出状況]12区に位置し、Ⅲ層で検出した。両端が調査区外へと続く。
[重複遺構]ＳＩ05と重複する。断面状況から、本遺構の方が新しいものと判断した。
[形状・規模]確認部分では、長さ約290cm、幅約50～70cmを測り、直線状に延びる。軸方位は北北東－南南西である。
[壁・底面]壁はほぼ直角的な立ち上がりで、鍋形の断面形を呈する。深さは約20cmを測り、南側に向かってやや低位となる。
[堆積土]黒褐色土の単層である。
[遺物]出土遺物なし。
[時期]出土遺物がないため詳細は不明だが、重複関係から奈良時代以降と推定される。

SI01

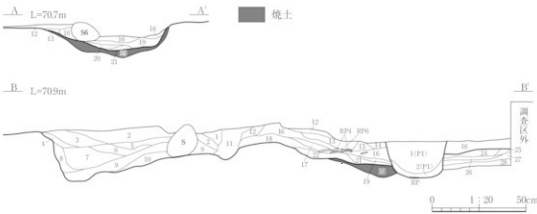


1. 10YR3/2 表土
1. 10YR3/4 暗褐色 粘性あり 締まりあり
下位に礫状に炭化物層
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色
粘性あり 締まりあり
3. 10YR1.7/1 黒色 粘性あり 締まり欠
炭化物層
4. 10YR3/2 黒褐色
粘性ややあり 締まりややあり
やや砂質、炭化物少量含む
5. 10YR4/2 灰黄褐色
粘性ややあり 締まりあり
6. 10YR3/2 黒褐色 粘性あり 締まりあり
炭化物少量含む
7. 10YR4/3 にぶい黄褐色
粘性あり 締まりややあり
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色
粘性あり 締まりあり
砂質土ブロック状に混入
9. 10YR3/2 黒褐色 粘性あり 締まりややあり
砂質土混入、炭化物少量含む
10. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土
粘性なし 締まり欠
11. 10YR3/4 暗褐色 粘性欠 締まりあり
焼土ブロック層
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色
粘性あり 締まりややあり
13. 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土
粘性なし 締まり欠
14. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
粘性なし 締まり欠
炭化物少量含む
15. 10YR2/1 黒色 粘性あり 締まりややあり
炭化物層
16. 10YR4/2 灰黄褐色 粘性あり 締まりあり
旧遺構埋土か？

SI01カマド

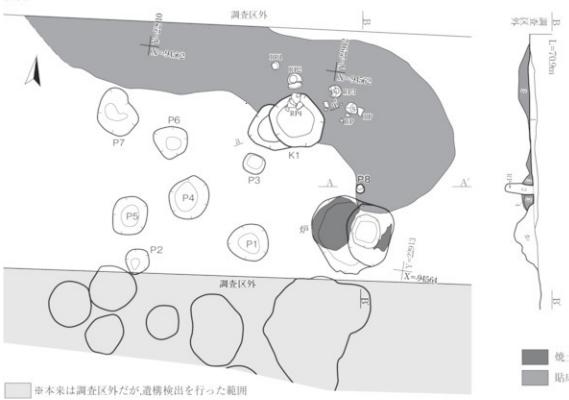


第6図　ＳＩ01①



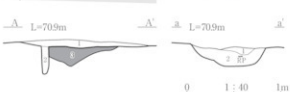
1. 10YR3/4 暗褐色 粘性ややあり 締まりあり
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性あり 締まりあり
3. 10YR2/2 黒褐色 粘性あり 締まりなし
4. 10YR5/2 灰黄褐色 粘性なし 締まりなし
5. 10YR2/2 黒褐色 粘性あり 締まりややあり
6. 10YR5/2 灰黄褐色 粘性なし 締まりややあり
7. 10YR2/2 黒褐色 粘性あり 締まりなし
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性なし 締まりあり 黒色土縞状に含む
9. 10YR4/2 灰黄褐色 粘性なし 締まりややあり
10. 10YR3/3 暗褐色 粘性あり 締まりややあり
11. 10YR3/3 暗褐色 粘性ややあり 締まりあり 炭化物微量含む
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性ややあり 締まりあり
13. 10YR6/2 灰黄褐色 粘性強あり 締まりなし 粘土層
14. 10YR2/2 黒褐色 粘性あり 締まりなし
黄橙色ブロック少量、炭化物多く含む
15. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性あり 締まりなし 灰黄褐色粘土含む
16. 10YR2/2 黒褐色 粘性あり 締まりなし 炭化物中量含む
17. 10YR4/4 褐色 粘性あり 締まりややあり 炭化物少量含む
18. 10YR3/2 暗褐色 粘性あり 締まりあり
19. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘性あり 締まりなし 焼土ブロック少量含む
20. 10YR7/3 にぶい黄橙色 粘性強あり 締まりなし 粘土層
21. 10YR3/2 暗褐色 粘性あり 締まりなし 灰黄褐色粘土・焼土ブロック・炭化物多量含む
22. 10YR3/4 暗褐色 粘性あり 締まりあり
23. 5YR3/6 暗赤褐色 粘性あり 締まりあり 燃焼部焼土
24. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性ややあり 締まりあり 焼土ブロック・炭化物多量含む
25. 10YR5/3 にぶい黄褐色 粘性なし 締まりあり
26. 10YR2/1 黒色 粘性あり 締まりなし 炭化物層
27. 10YR4/2 灰黄褐色 粘性あり 締まりあり
28. 10YR2/1 黒色 粘性あり 締まりなし 炭化物層

SI02



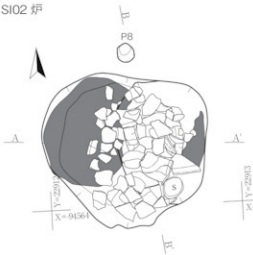
A-A'・B-B'
1. 10YR4/2 灰黄褐色 粘性ややあり 締まりあり
2. 10YR2/3 黒褐色 粘性あり 締まりなし P8 埋土
3. 10YR3/2 黒褐色 粘性あり 締まりややあり
砂質ブロック混入、貼床土
4. 10YR3/3 暗褐色 粘性なし 締まりややあり 貼床土

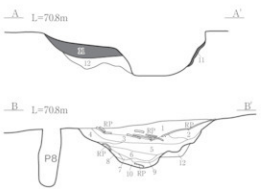
a-a'
1. 10YR3/2 黒褐色
粘性ややあり 締まりあり
2. 10YR3/4 暗褐色
粘性あり 締まりややあり



第7図　ＳＩ01②、ＳＩ02①

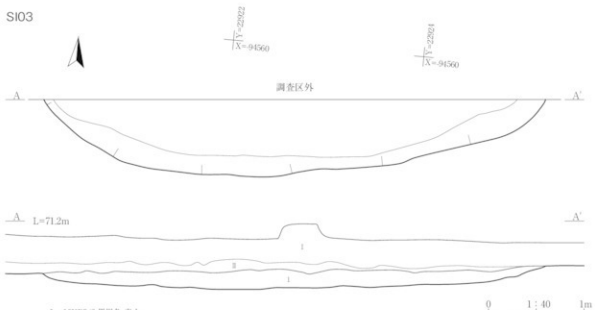
SI02 炉





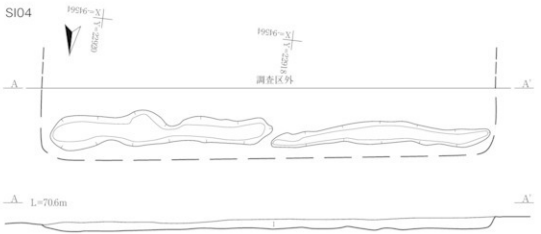
1. 10YR3/3 暗褐色 粘性あり 締まりややあり
2. 7.5YR3/3 暗褐色 粘性あり 締まり欠
3. 10YR2/2 黒褐色 粘性ややあり 締まりややあり
4. 10YR3/2 黒褐色 粘性あり 締まりややあり
5. 7.5YR3/4 暗褐色 粘性あり 締まりややあり 焼土ブロック微量含む
6. 10YR3/2 黒褐色 粘性あり 締まり欠
　上位に黒色土、褐色土ブロック微量、白色粘土含む
7. 7.5YR3/4 暗褐色 粘性あり 締まり欠 焼土ブロック少量、炭化物微量含む
8. 10YR5/2 にぶい黄褐色 粘性ややあり 締まりややあり
9. 10YR3/2 黒褐色 粘性あり 締まり欠
10. 7.5YR4/3 褐色 粘性あり 締まり欠 橙茶土ブロック少量含む
11. 5YR6/6 橙色 粘性ややあり 締まりあり 焼土
12. 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性あり 締まり欠 炭化物微量含む、掘り方覆土

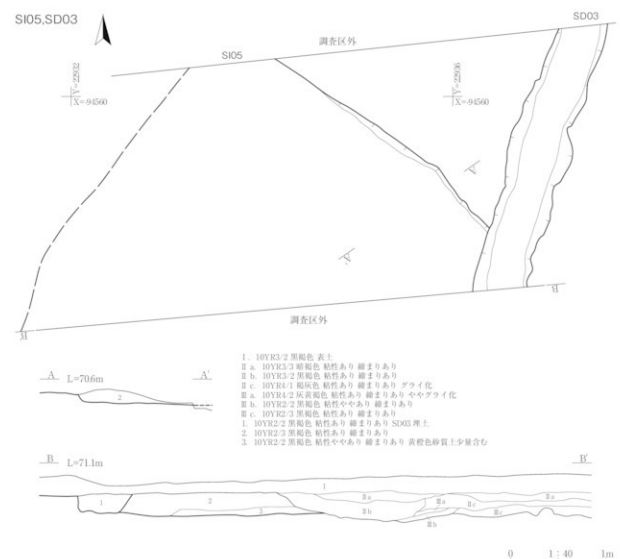
SI03



I．10YR3/2 黒褐色 表土
II．10YR5/2 灰黄褐色 耕作土
1．10YR2/3 黒褐色 粘性あり 締まりあり 炭化物少量含む

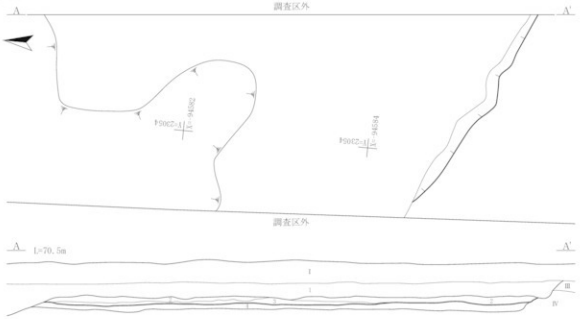
第8図　ＳＩ02②、ＳＩ03





第９図　ＳＩ04・05、ＳＤ03

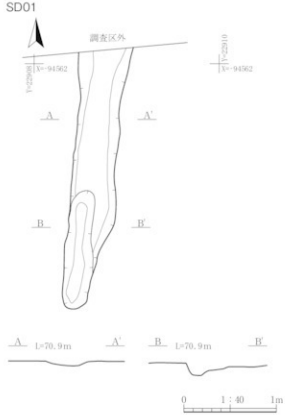
SI06



I．表土
II．灰白色砂質土
IV．黒色粘土質土

1．10YR3/1 黒褐色 粘性ややあり 締まりあり 酸化鉄分の粒多い、攪乱された層
2．10YR3/2 黒褐色 粘性ややあり 締まりあり 砂少量含む
3．10YR5/2 灰黄褐色 粘性欠 締まり欠
4．10YR5/2 灰黄褐色 粘性欠 締まりあり 黒色土ブロック多く含む、貼床土

SD01



第10図　ＳＩ06、ＳＤ01

3　出　土　遺　物

出土遺物の大半を占めるのは土師器・須恵器である。調査区全体で、土師器19,334.7ｇ、須恵器5,224.2ｇが出土した。遺構内出土は、このうち土師器13,921.8ｇ（72％）、須恵器3,002.1ｇ（57％）である。遺構の中では、ＳＩ01・ＳＩ02からの出土が多く、その他の遺構での出土は少量である。

土師器・須恵器の掲載点数は60点で、内訳は、土師器甕28点、土師器鉢１点、土師器坏15点、須恵器大甕２点、須恵器壺３点、須恵器坏11点である。

土師器甕は、ほとんどの個体が口縁部、底部のいずれかを欠損し、器高が分かるものは１点のみである。ロクロ使用の長胴甕が大半で、この他にロクロ使用の小形甕が少数出土している。ロクロ長胴甕の多くは、口縁部～体部上半がロクロ調整、外面体部下半が主にケズリ調整、内面がハケメ・ナデ等で調整され、一部の個体では外面口縁部付近にタタキメの痕跡が残る。口縁部は短く外反し、体部上半に膨らみを持つ。ロクロ不使用の45は口縁部の幅がやや広く、頸部に段を持ち、他の甕と異なった特徴をもつ。

土師器坏はロクロ使用である。底部切り離しは回転糸切りのものがほとんどで、再調整（回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリ）、不明のものを少数ずつ含む。内面調整は、内黒のものと非内黒のものがある。器形は、底部から緩やかに内湾して立ち上がるものと、直線的に立ち上がるものがある。なお、非内黒の16・36～38・46・52～54・56・57については、「須恵系土器」「あかやき土器」など、別の呼称を用いるべきであったかもしれないが、本書では土師器として分類しているのでご了承願いたい。

須恵器大甕・須恵器壺は破片のみの出土で、全体を復元できたものはない。

須恵器坏は、底部回転糸切りのものがほとんどで、回転ヘラ切りは１点のみである。

土師器・須恵器以外に12世紀の遺物として、手づくねかわらけ１点、国産陶器３点が出土した。また、石器として敲磨器類２点、近世の遺物として寛永通寶１点が出土した。以下、出土地点別に述べていく。

（1）土　　器

ＳＩ01出土土器（第11・12図、写真図版22・23）

土師器4,773.6ｇ、須恵器864.2ｇが出土した。土師器甕11点、土師器坏３点、須恵器坏５点を掲載した。

３～６は土師器長胴甕の口縁部～体部で、ロクロ使用である。口縁部付近は回転ナデ、体部外面には縦方向のケズリ、体部内面にはハケメやナデ調整が施される。５は体部上位にタタキメの痕跡が確認できる。体部上半がやや膨らむ器形で、口縁部は短く外反し、口縁部に最大径を持つ。

７・８は小形の土師器甕の口縁部～体部である。２点ともロクロ調整のみで、長胴甕よりもロクロ痕の凹凸が顕著である。口縁部は短く外反し、口縁端部は上方につまみ出される。

９～13は土師器甕の体部～底部である。９～11は器壁が薄く、外面はケズリ、内面はナデ調整され、９・10の内底面はナデによる凹凸がある。９は外底面全体に砂が付着する。９～11は、上述の３・４などと同一個体の可能性がある。12は底部回転糸切りで、小形甕の可能性がある。13は他の底部と異なり、厚手でしっかりしている。

14～16はロクロ使用の土師器坏である。14は底部が回転ヘラケズリ再調整、底部から口縁部にかけて内湾する器形で、器高が6.3cmと高く、塊に近い形状である。15は底部回転糸切り、底部のみで器高は不明だが、14と同様に底部付近は内湾する。16はほぼ完形品で、内外面ともロクロ調整のみ、底部

は回転糸切りで、直線的な体部を持つ。

17～21は須恵器坏で、いずれも底部は回転糸切りである。17の内面口縁部付近には黒色の付着物がみられる。19は体部がやや内湾し、器高が7.2cmで塊に近い形状である。19の体部下端～底面には布目の痕跡が確認できる。

ＳＩ02出土土器（第13・14図、写真図版23～25）

土師器7,182.3ｇ、須恵器1269.1ｇが出土した。土師器甕12点、土師器鉢１点、土師器坏４点、須恵器坏４点を掲載した。

22～29はロクロ使用の土師器長胴甕である。22は口縁部～底部まで、それ以外は口縁部～体部の残存である。口縁部付近は回転ナデ、体部外面にはナデ・ケズリ、体部内面はロクロ・ナデ調整が施される。23・26・28・29は、口縁部～体部上半にタタキメが確認できる。口縁部は短く外反する。22は体部中央付近に最大径を持つ。24の内外面には黒色の付着物がある。

30・31は小形の土師器甕の口縁部～体部で、ロクロ調整のみ確認できる。30の口縁上端はほぼ垂直に立ち上がり、31の口縁部は単純に外反する。

32・33は土師器甕の体部～底部である。32の底部は回転糸切りで、小形甕とみられる。33は厚手の底部で、内面に黒色処理とミガキ、体部下端と底面にケズリが施される。

34は土師器鉢の口縁部である。ロクロ使用で、内面にはミガキが施される。口径は、推定値で25.0cmであり、体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる器形である。

35～38はロクロ使用の土師器坏である。４点とも体部は内湾し、38は底部が下方にやや突出する。35は内黒で、底面にケズリが施される。36～38は非内黒で、底部回転糸切りである。36は底面に「十」字の線刻が施される。37は内外面に黒色の付着物がある。

39～42は須恵器坏である。39は底部回転ヘラ切り、40～42は回転糸切りである。体部は、39・42が内湾し、40・41は直線的である。42は内面に黒色の付着物がある。

不掲載とした遺物の中には、須恵器壺・須恵器大甕の破片などが含まれる。

ＳＩ03出土土器（第15図、写真図版25）

12世紀の陶器１点（43）を掲載した。43は常滑産陶器壺の体部片で、外面に押印文が確認できる。この他に土師器111.7ｇ、須恵器42.6ｇが出土し、この中には土師器甕・土師器坏・須恵器壺・須恵器坏の破片などが含まれるが、小片のため掲載していない。

ＳＩ04出土土器（第15図、写真図版25）

土師器163.4ｇ、須恵器75.3ｇが出土した。須恵器坏１点（44）を掲載した。44は口縁部付近のみで、底部の切り離し方については不明である。不掲載遺物には、土師器甕・土師器坏・須恵器甕の破片などが含まれる。

ＳＩ05出土土器（第15図、写真図版25）

土師器368.2ｇ、須恵器16.5ｇが出土した。土師器甕１点（45）を掲載した。45は、非ロクロ成形の土師器甕で、口縁部～体部下半までが残存する。口縁部はやや長く外反し、口縁部と体部の境界に明瞭な段を持つ。器面調整は、口縁部にヨコナデ、体部外面にはハケメの後ミガキ、体部内面にはハケメ、ナデが施される。不掲載遺物には、土師器坏内黒、須恵器壺の破片などが含まれる。

ＳＩ06出土土器（第15図、写真図版25）

土師器1109.1ｇ、須恵器718.2ｇが出土した。土師器坏１点（46）を掲載した。46は底部回転糸切りで、体部下端には回転ケズリが施される。厚手で重量感がある。不掲載遺物には、土師器甕・須恵器大甕・須恵器壺の破片などが含まれる。

遺構外出土土器（第15・16図、写真図版26）

土師器5,475.4ｇ、須恵器2,238.3ｇが出土した。遺構外出土が最も多いのは12区（土師器2,988.8ｇ、須恵器490.0ｇ）、次いで19区（土師器1,273.8ｇ、須恵器1,062.5ｇ）で、いずれも遺構を検出した区域である。土師器甕４点、土師器坏７点、須恵器大甕２点、須恵器壺３点、須恵器坏１点を掲載した。

47～50は土師器甕の底部である。47は底径10.6cmでやや大きめの底部である。48は底面付近がやや外側へ広がる。50は回転糸切りの底部で、底径は5.4cmと小さく、小形甕とみられる。

51～57はロクロ使用の土師器坏である。底部は、51・52がケズリ、53が不明、54が回転ヘラケズリである。55は回転糸切りで、体部下端と底面の一部にケズリが施される。56・57は回転糸切りである。51と55は内黒で、他は非内黒である。

58・59は須恵器大甕の口縁部で、口縁端部に沿ってタタキメが確認できる。

60～62は須恵器壺である。60は口縁部で、内外面にカキメ調整される。61・62は底部のみで、２点とも外面の体部下端に平行タタキメが確認できる。61の内面には黒色の付着物がある。

63は須恵器坏で、底部は回転糸切りである。

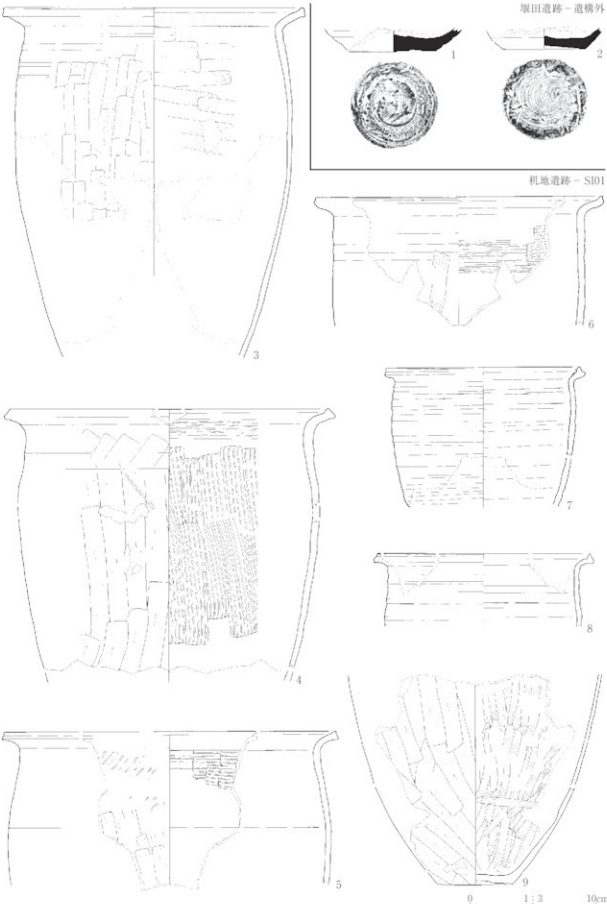
土師器・須恵器以外では、12世紀の手づくねかわらけ１点（64）、国産陶器２点（65･66）が出土した。64は手づくねかわらけの口縁部～体部片で、小片のため口径は不明である。体部中央に僅かな段があり、それと平行に２条の筋がみられる。65は常滑産甕の体部片で、外面に押印文が確認できる。204は常滑産片口鉢の口縁部片で、小片のため口径は不明である。64・65は11区遺構外、66は16区遺構外出土で、ＳＩ03出土の43も含め、12世紀の遺物が出土したのはいずれも机地遺跡の南西側である。

（２）石　　器（第16図、写真図版26）

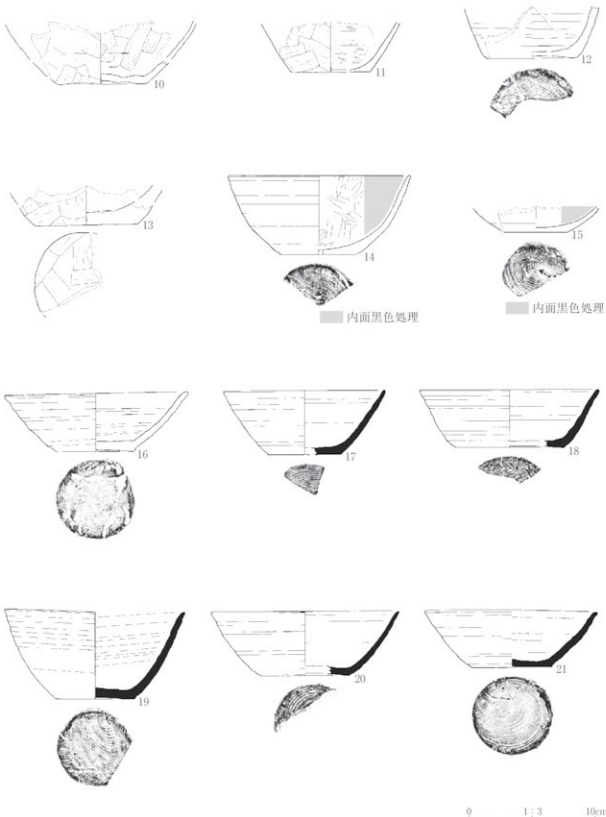
敲磨器類２点（67・68）が出土した。67は側面２面と上面に磨痕がみられ、石質は奥羽山脈産の安山岩である。ＳＩ01煙道からの出土である。68は側面４面に磨痕、上下２面に敲打痕がみられ、石質は奥羽山脈産の安山岩である。12区遺構外出土である。

（３）銭　　貨（第16図、写真図版26）

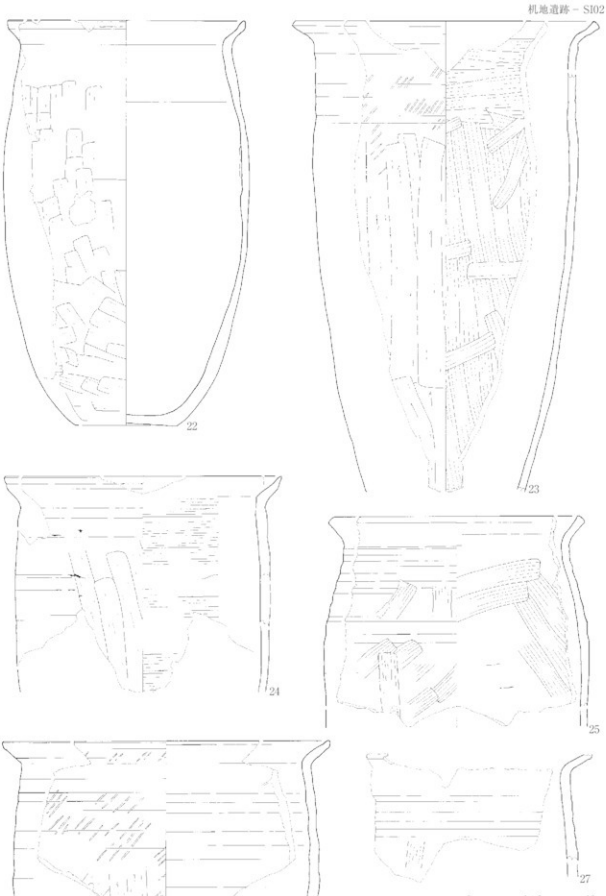
寛永通寶１点（69）が出土した。1697年初鋳の新寛永である。15区遺構外にて出土した。



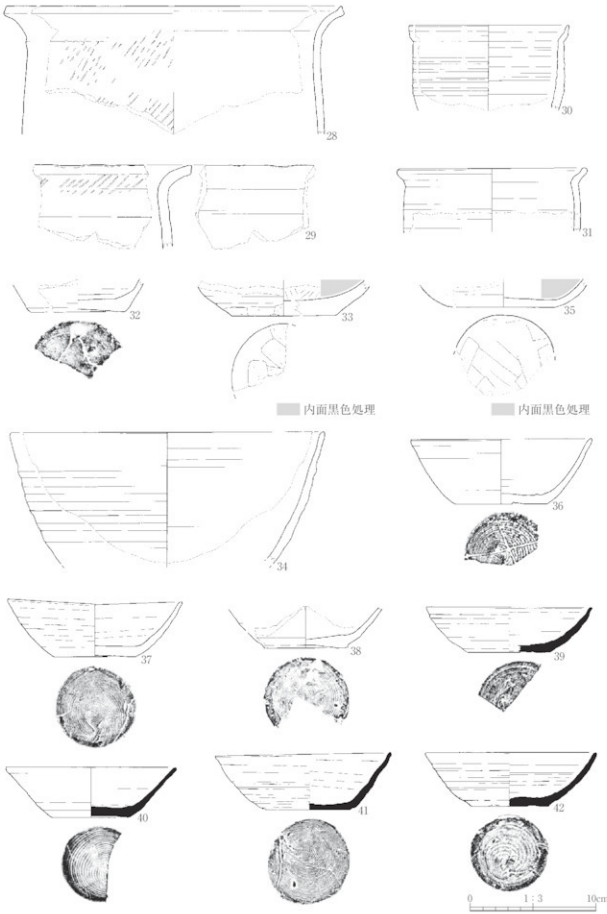
第11図　土器①



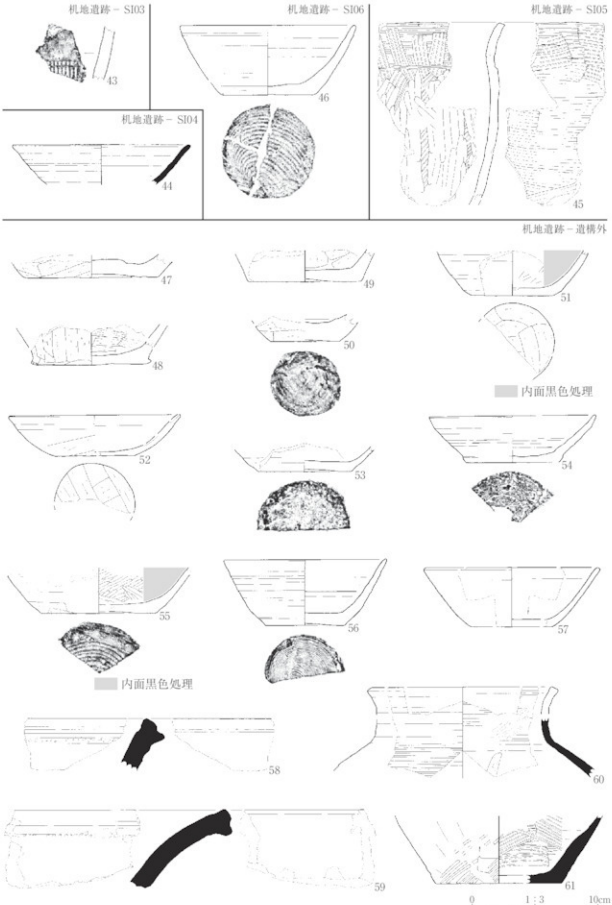
第12図　土器②



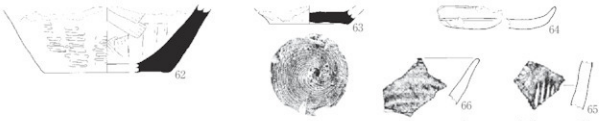
第13図　土器③

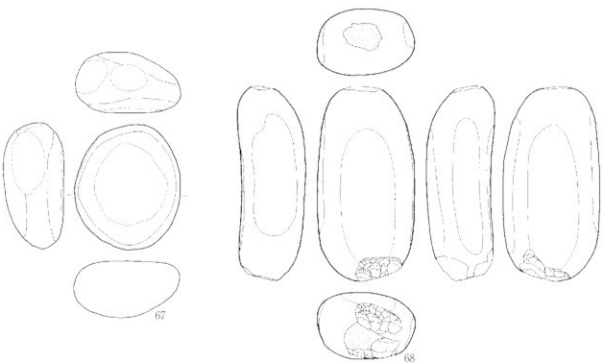


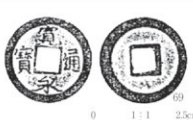
第14図　土器④


机地遺跡－SI03
43
机地遺跡－SI06
46
机地遺跡－SI05
45
机地遺跡－SI04
44
机地遺跡－遺構外
47
49
51
48
50
内面黒色処理
52
53
54
55
56
57
内面黒色処理
58
60
59
61
0
1：3
10cm

第15図　土器⑤







第16図　土器⑥、石器、銭貨

第１表　土器観察表

遺物No	出土地点	層位ほか	種別	器種	底部	外面調整	内面調整	色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	備　　考
1	遺構外 7区	表土	須恵器	坏	回転ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ	灰	－	(1.9)	6.9	85.6	
2	遺構外 8区	表土	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	－	(1.7)	6.6	76.2	
3	S101 カマド	RP5	土師器	甕	なし	回転ナデ・ケズリ	回転ナデ・ナデ	灰白	<22.8>	(27.8)	－	247.0	
4	S101 カマド	RP4	土師器	甕	なし	回転ナデ・ケズリ	回転ナデ・ハケメ	灰白	<25.4>	(21.7)	－	366.3	
5	S101	埋土	土師器	甕	なし	タタキメ・回転ナデ・ケズリ	回転ナデ・ハケメ	灰白	<26.2>	(12.1)	－	106.1	
6	S101 カマド	RP1	土師器	甕	なし	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ハケメ	浅黄橙	<22.7>	(10.2)	－	90.0	
7	S101 カマド	RP6	土師器	小形甕	なし	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	<15.4>	(11.1)	－	200.6	
8	S101	埋土	土師器	小形甕	なし	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙	<16.8>	(5.8)	－	64.0	
9	S101	床面 RP1	土師器	甕	砂底	ケズリ	ナデ	浅黄橙	－	(16.6)	6.0	2088	
10	S101	埋土	土師器	甕	ナデ	ケズリ	ナデ	にぶい黄橙	－	(5.0)	7.0	81.2	
11	S101	床面 RP2	土師器	甕	ナデ	ケズリ	ナデ	浅黄橙	－	(4.9)	<6.2>	34.5	
12	S101	貼床土	土師器	甕	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	－	(4.1)	<7.2>	35.0	
13	S101	貼床土	土師器	甕	ケズリ	ケズリ	ナデ	にぶい橙	－	(3.0)	<8.2>	84.5	
14	S101	床面（調査区外）	土師器	坏	回転ヘラケズリ	回転ナデ	黒色処理・ミガキ	浅黄橙	<14.4>	6.3	<6.0>	86.0	
15	S101	竈構 床面？	土師器	坏	回転糸切り	回転ナデ	黒色処理・ミガキ	浅黄橙	－	(2.1)	5.0	28.5	
16	S101	RP2（床面）	土師器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	14.5	4.7	6.2	184.0	
17	S101	埋土	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	<12.8>	5.1	<5.8>	34.6	内面にスス付着
18	S101	貼床土	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	<14.2>	4.6	<8.6>	30.0	
19	S101 カマド	埋土	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	<14.4>	7.2	6.2	149.3	体部下端に布目？痕
20	S101 カマド	RP3	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	<14.9>	5.1	<7.1>	82.3	
21	S101	竈構土坑？　埋土	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	13.4	4.6	6.3	173.9	
22	S102 炉1	燃焼面上	土師器	甕	不明	回転ナデ・ケズリ	回転ナデ	灰白	<18.9>	32.1	<8.0>	420.8	
23	S102 炉1	燃焼面上	土師器	甕	なし	タタキメ・回転ナデ・ケズリ	ナデ	灰白	<24.4>	(37.3)	－	518.8	
24	S102 炉1	埋土	土師器	甕	なし	回転ナデ・ケズリ	回転ナデ・ナデ	浅黄橙	<22.0>	(17.1)	－	289.0	内外面スス付着
25	S102 炉1	埋土	土師器	甕	なし	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	灰白	<19.4>	(16.7)	－	200.2	
26	S102 炉1	燃焼面上	土師器	甕	なし	タタキメ・回転ナデ・ケズリ	回転ナデ	浅黄橙	<26.0>	(13.1)	－	185.2	
27	S102 炉1	燃焼面上	土師器	甕	なし	回転ナデ	回転ナデ	橙	－	(9.7)	－	133.1	
28	S102	南方（調査区外）	土師器	甕	なし	タタキメ・回転ナデ	回転ナデ	灰白	<26.5>	(10.0)	－	118.0	
29	S102 K1	RP4 群	土師器	甕	なし	タタキメ・回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	－	(6.6)	－	70.2	
30	S102 炉1	埋土	土師器	小形甕	なし	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	<12.6>	(6.8)	－	70.5	
31	S102 炉1内土坑	埋土	土師器	小形甕	なし	回転ナデ	回転ナデ	灰白	<14.8>	(5.0)	－	52.7	
32	S102	南方　調査区外	土師器	甕	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙	－	(2.2)	<7.5>	49.0	
33	S102 P10・11	埋土	土師器	甕	ケズリ	回転ナデ・ケズリ	黒色処理・ミガキ	にぶい黄橙	－	(2.8)	<6.2>	85.0	
34	S102 炉1	埋土	土師器	鉢	なし	回転ナデ	回転ナデ・ミガキ	浅黄橙	<25.0>	(10.7)	－	125.7	
35	S102 炉1	燃焼面上	土師器	坏	ケズリ	回転ナデ	黒色処理・ミガキ	にぶい黄橙	－	(2.2)	<8.0>	65.8	
36	S102 K1	RP1	土師器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	<14.4>	5.1	<7.2>	67.8	底面に十字の墨線
37	S102 K1	RP2	土師器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	橙	13.8	4.6	6.6	163.5	内外面スス付着
38	S102	貼床土	土師器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	－	(3.1)	6.6	71.5	

遺物No	出土地点	層位ほか	種別	器種	底部	外面調整	内面調整	色調	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	備　考
39	S102 竪穴内上坑	埋土	須恵器	坏	回転ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	<13.1>	3.6	6.6	47.1	
40	S102	貼床土	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	<13.4>	4.0	6.0	74.6	
41	S102 P4周辺		須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	14.0	4.6	<6.4>	111.2	
42	S102 K1	RP3	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	13.6	4.3	6.2	187.0	内面にスス付着
43	S103	埋土	陶器	壺					-	(4.2)	-	39.1	常滑産、外面に押印文、体部破片
44	S104 竪溝	埋土	須恵器	坏	なし	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	<14.2>	(3.2)	-	15.1	
45	S105	埋土	土師器	椀	なし	ハケメ・ミガキ	ハケメ・ナデ	にぶい橙	-	(14.5)	-	80.7	
46	S106	埋土上位	土師器	坏	回転糸切り	回転ナデ・回転ケズリ	回転ナデ	浅黄橙	<14.0>	5.5	<7.6>	171.2	
47	遺構外 12区	中央部遺構？埋土	土師器	椀	不明	ケズリ	ナデ	浅黄橙	-	(1.8)	10.6	224.7	
48	遺構外 19区	南側カクラン	土師器	椀	不明	ケズリ	ナデ	浅黄橙	-	(3.2)	<9.5>	124.9	
49	遺構外 19区	南側カクラン	土師器	椀	不明	不明	ケズリ	浅黄橙	-	(2.6)	<9.0>	95.0	
50	遺構外 12区	中央部遺構？埋土	土師器	椀	回転糸切り	ケズリ	回転ナデ	橙	-	(2.1)	5.4	87.1	
51	遺構外 12区	B 層	土師器	坏	ケズリ	回転ナデ	黒色処理・ミガキ	にぶい黄橙	-	(3.6)	<6.4>	43.9	
52	遺構外 12区	中央部遺構？埋土	土師器	坏	ケズリ	回転ナデ・ケズリ	回転ナデ	褐灰	<13.6>	3.2	6.4	60.0	
53	遺構外 12区	調査区外遺構ま検出面	土師器	坏	不明	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	-	(2.2)	<7.4>	40.9	
54	遺構外 16区	表土	土師器	坏	回転ヘラケズリ	回転ナデ	回転ナデ	灰白	<13.2>	3.7	<7.4>	55.5	
55	遺構外 19区	南側カクラン	土師器	坏	回転糸切り・ケズリ	回転ナデ・ケズリ	黒色処理・ミガキ	にぶい橙	-	(3.6)	<9.2>	64.3	
56	遺構外 16区	表土	土師器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	<13.0>	5.2	<6.4>	80.0	
57	遺構外 12区	表土	土師器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	<13.6>	4.7	<6.4>	29.5	
58	遺構外 16区	表土	須恵器	大甕	なし	タタキメ・回転ナデ	回転ナデ	黄灰	-	(4.2)	-	66.3	
59	遺構外 19区	南側カクラン	須恵器	大甕	なし	回転ナデ	回転ナデ	黄灰	-	(6.2)	-	235.3	
60	遺構外 12区	B 層	須恵器	壺	なし	回転ナデ・カキメ	回転ナデ・カキメ	黄灰	<15.2>	(7.2)	-	40.7	
61	遺構外 11区	表土	須恵器	壺	不明	ケズリ・タタキメ	回転ナデ・ハケメ	黄灰	-	(5.4)	<10.0>	80.1	内外面スス付着
62	遺構外 12区	B 層	須恵器	壺	不明	タタキメ	ナデ	黄灰	-	(5.0)	<10.0>	139.9	
63	遺構外 16区	表土	須恵器	坏	回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ	灰白	-	(1.2)	6.3	73.1	
64	遺構外 11区	トレンチ	手づくねかわらけ						-	1.8	-	15.9	1段ナデ、口縁～底部破片
65	遺構外 11区	表土	陶器	壺					-	(4.0)	-	16.9	常滑産、外面に押印文、体部破片
66	遺構外 16区	表土	陶器						-	(3.8)		18.6	常滑産、口縁部破片

第２表　石器観察表

遺物No	種別	出土地点	層位ほか	長S(cm)	幅(cm)	厚S(cm)	重量(g)	石質	産地	時代	備　考
67	敲磨器類	S101 埋遺	埋土	10.0	8.3	4.8	568.9	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	3面に磨痕
68	敲磨器類	遺構外 12区	表土	15.5	7.7	5.3	1016.6	安山岩	奥羽山脈	新生代新第三紀	4面に磨痕、2面に敲打痕

第３表　銭貨観察表

遺物No	種別	出土地点	層位ほか	長S(cm)	幅(cm)	厚S(cm)	重量(g)	備　考
69	寛永通宝	遺構外 15区	トレンチ	2.34	2.34	0.09	2.3	新寛永通宝(1697年初鋳)

Ⅵ まとめ

堰田遺跡・机地遺跡の両遺跡を合わせて計4,542㎡を調査し、遺構は平安時代の竪穴住居跡５棟、住居状施設１棟、溝跡２条、時期不明の土坑１基を確認し、遺物は土師器20,057.1ｇ、須恵器が5,862.7ｇ、石器類２点、12世紀のかわらけ１点、12世紀の国産陶器３点、近世の銭貨１点が出土した。

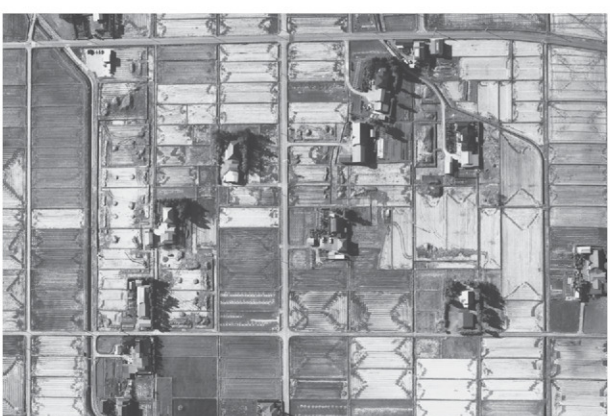
北側の堰田遺跡では、遺構は調査区南西側で確認した時期不明の土坑１基のみで、竪穴住居跡などは検出しなかった。ただし調査区の至るところで疎らに土師器・須恵器が出土しており、今回の調査区外に集落が存在する可能性は否定できない。

南側の机地遺跡では、調査区中央の微高地の縁辺部に遺構が集中して確認された。今回の調査区は細長い範囲に限定されていたため遺構全体を完掘できたものはなく、削平による遺存状態の悪さもあり、各遺構について得られた情報は断片的である。竪穴住居跡とした５棟のうち、カマドを確認したのはＳＩ01の１棟のみである。ＳＩ02は竪穴部が残存しないが、炉・柱穴を検出し、居住以外の目的で使用された可能性がある。ＳＩ03・05・06は竪穴部の一部を確認しただけでカマドは不明であり、ＳＩ04は周溝のみしか残存しておらず、詳細は不明である。遺物がある程度出土したＳＩ01・ＳＩ02は、土器の特徴などから平安時代(９世紀前半頃)の遺構と想定される。その他の遺構では出土遺物はごく少量であり判断に苦しむが、ＳＩ05は奈良時代、ＳＩ03・ＳＩ04・ＳＩ06・ＳＤ01は平安時代の遺構と推定される。ＳＩ03は12世紀の陶器が出土しており他のものよりかなり新しい時期に属する可能性もある。遺構の時期・性格については不確定な部分が多い。

なお、周辺の遺跡の項目で述べた通り、本遺跡の調査後には近隣遺跡での調査が続けて行われている。本遺跡の調査成果については、周辺部の調査成果とも比較しながら、今後とも検討を重ねていきたい。

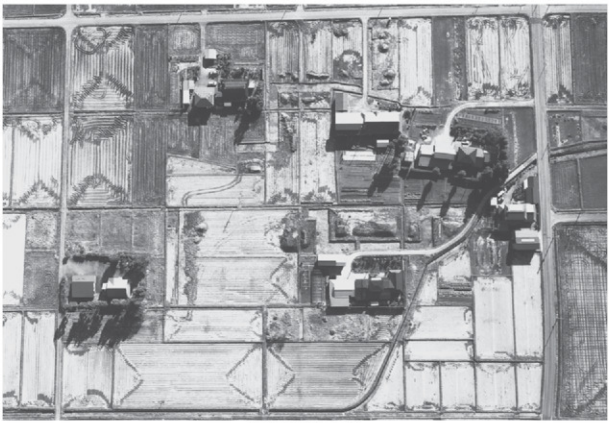
写　真　図　版

遺跡周辺(西から)

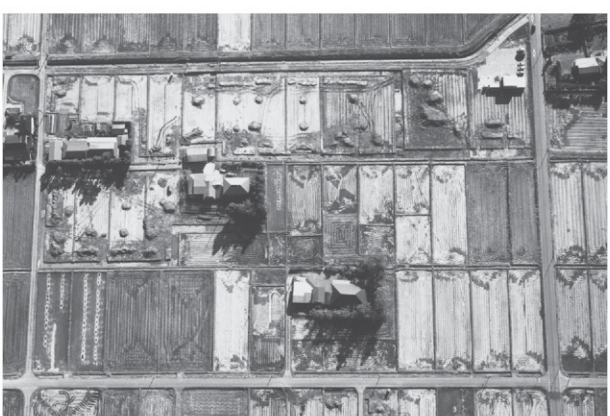


遺跡全景(直上から)

写真図版1　航空写真①



堰田遺跡全景（直上から）



机地遺跡全景（直上から）

写真図版２　航空写真②

1区西側検出状況
（西から）

2区検出状況
（西から）

1区東側完掘状況
（南から）

写真図版３　堰田遺跡①

8区北側検出状況
（西から）

8区北側検出状況
（東から）

8区東側検出状況
（北から）

写真図版4　堰田遺跡②

3区検出状況
（南から）

4・5区検出状況
（南から）

5区基本層序
（南から）

写真図版5　堰田遺跡③

6区東端検出状況
（東から）

6区東側検出状況
（南から）

6区中央検出状況
（南東から）

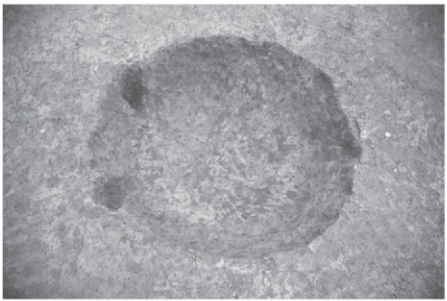
写真図版6　堰田遺跡④

6区西端検出状況
（西から）

9区検出状況
（南から）

7区検出状況
（西から）

写真図版７　堰田遺跡⑤



ＳＫ01完掘
（南から）

ＳＫ01断面
（南から）

８区作業風景
（東から）

写真図版８　堰田遺跡⑥

11区西側検出状況
（西から）

11区東側検出状況
（南から）

12区西側検出状況
（西から）

写真図版９　机地遺跡①

12区東側検出状況
（東から）

13区西端検出状況
（南から）

13区西側検出状況
（西から）

写真図版10　机地遺跡②

13区東側検出状況
（東から）

13区東端検出状況
（北から）

14区西側検出状況
（西から）

写真図版11　机地遺跡③

14区東側検出状況
（南から）

15区検出状況
（東から）

18区検出状況
（北から）

写真図版12　机地遺跡④

16区西側検出状況
（西から）

16区東側検出状況
（東から）

17区検出状況
（東から）

写真図版13　机地遺跡⑤

ＳＩ01遺物出土状況
（南から）

ＳＩ01完掘状況
（南から）

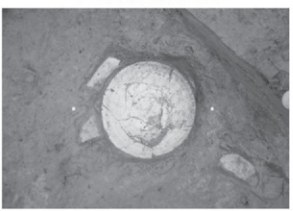
ＳＩ01遺物出土状況
（西から）

写真図版14　机地遺跡⑥

ＳＩ01断面（北から）

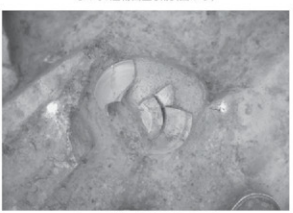
ＳＩ01遺物出土状況（西から）

ＳＩ01貼床範囲（北から）



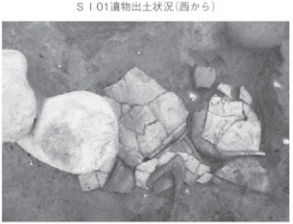
ＳＩ01遺物出土状況（西から）

ＳＩ01煙道断面（北西から）



ＳＩ01遺物出土状況（西から）

ＳＩ01カマド断面（北西から）



ＳＩ01遺物出土状況（西から）

写真図版15　机地遺跡⑦

ＳＩ02完掘状況
（東から）

ＳＩ02貼床除去後
（東から）

ＳＩ02断面
（西から）

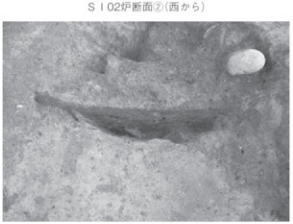
写真図版16　机地遺跡⑧

ＳＩ02炉断面①（西から）

ＳＩ02炉遺物出土状況（西から）

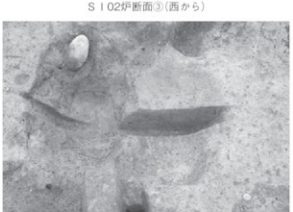
ＳＩ02炉断面②（西から）

ＳＩ02炉平面（西から）



ＳＩ02炉断面③（西から）

ＳＩ02炉完掘（西から）



ＳＩ02炉断面④（北から）

ＳＩ02遺物出土状況（西から）

写真図版17　机地遺跡⑨

ＳＩ03完掘（東から）

ＳＩ03断面（南から）

写真図版18　机地遺跡⑩

ＳＩ04断面（北から）

ＳＩ04完掘（東から）

写真図版19　机地遺跡⑪

ＳＩ05断面
（北から）

ＳＩ05断面
（北西から）

ＳＩ05完掘
（南西から）

写真図版20　机地遺跡⑫

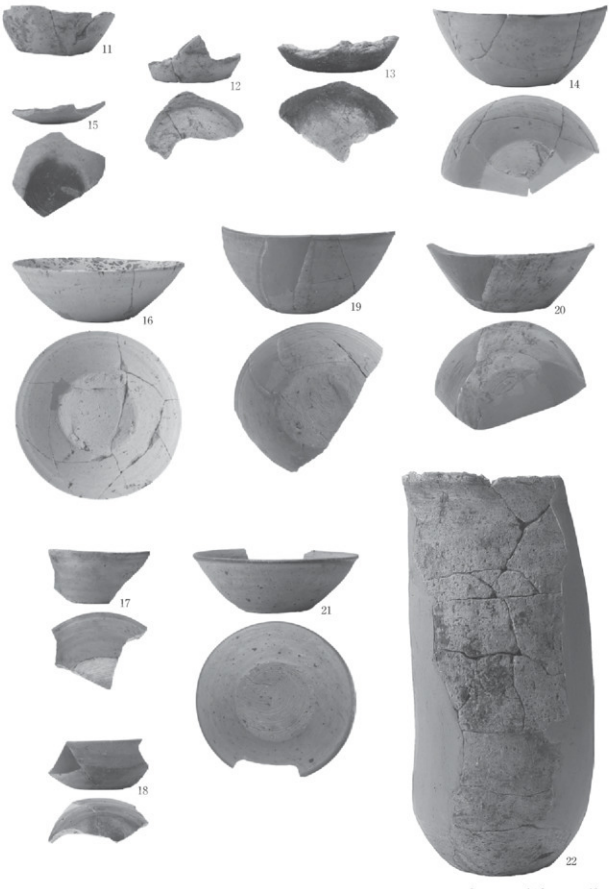
ＳＩ06完掘
（東から）

ＳＩ06完掘
（北から）

ＳＩ06断面
（西から）

写真図版21　机地遺跡⑬

写真図版22　土器①

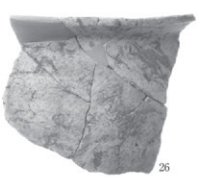


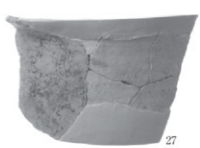
写真図版23　土器②

23

24

25


26


27

28

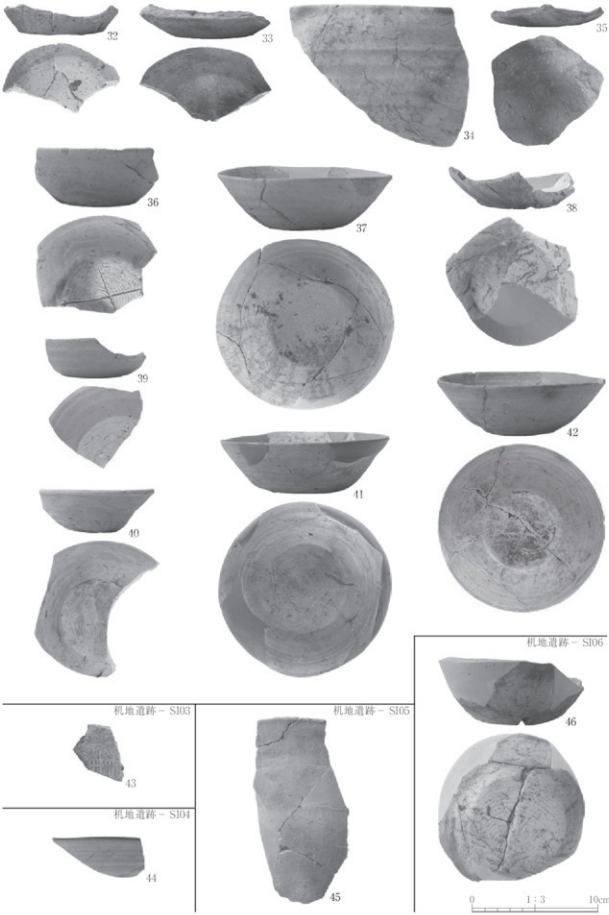
29

30

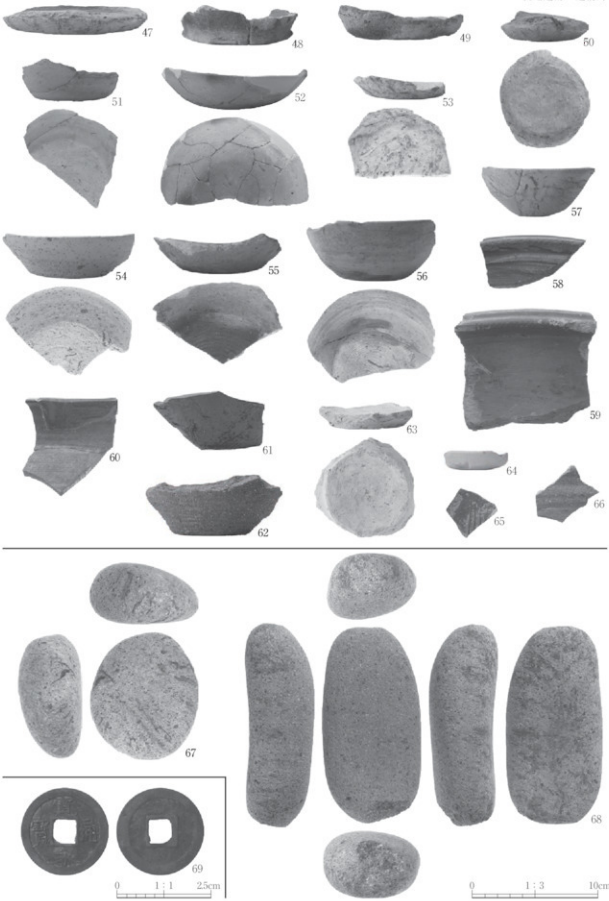
31

0　1：3　10cm

写真図版24　土器③


32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
机地遺跡－SI06
46
机地遺跡－SI03
43
机地遺跡－SI04
44
机地遺跡－SI05
45
0
1：3
10cm

写真図版25　土器④



写真図版26　土器⑤、石器、銭貨

報告書抄録

ふりがな	せきた・つくえじいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	堰田・机地遺跡発掘調査報告書
副書名	経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第601集
編著者名	川又 晋・小林弘卓
編集機関	(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地　　TEL(019)638－9001
発行年月日	2012年3月27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
堰田遺跡	岩手県奥州市胆沢区南都田字二丁目40-2ほか	03215	NE15-1362	39度08分58秒	141度05分54秒	2010.10.01～2010.12.02	2,123㎡	経営体育成基盤整備事業(南下幅北部地区)に伴う緊急発掘調査
机地遺跡	岩手県奥州市胆沢区南都田字机地81-1ほか	03215	NE15-1394	39度08分58秒	141度05分54秒	2010.10.01～2010.12.02	2,419㎡	経営体育成基盤整備事業(南下幅北部地区)に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堰田遺跡	散布地	不明	土坑　1基	土師器・須恵器　小1袋	
机地遺跡	集落跡	平安 12世紀	竪穴住居跡　5棟 住居状施設　1棟 溝跡　2条	土師器・須恵器　3箱 敲磨器類　2点 手づくねかわらけ　1点 国産陶器　3点	

要約

堰田・机地遺跡は、JR東日本東北本線水沢駅の西北西約4.0km付近に位置する。堰田遺跡が北側、机地遺跡が南側に隣接する。旧河道の間のわずかな微高地に集落が形成されていたようである。

堰田遺跡では、土坑1基を検出し、遺構外から土師器・須恵器が少量出土した。

机地遺跡では、平安時代の竪穴住居群が検出され、土師器・須恵器が多く出土した。12世紀の遺物も少量ながら出土している。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第601集

堰田・机地遺跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業南下幅北部地区関連遺跡発掘調査

印　刷　平成24年3月21日
発　行　平成24年3月27日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話（019）638－9001

発　行　岩手県県南広域振興局農政部農村整備室
〒023－1111　岩手県奥州市江刺区大通り７番13号
電　話（0197）35－8443

（公財）岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電　話（019）654－2235

印　刷　㈲ジロー印刷企画
〒020－0066　岩手県盛岡市上田２丁目17番4号
電　話（019）651－6644

©　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2012